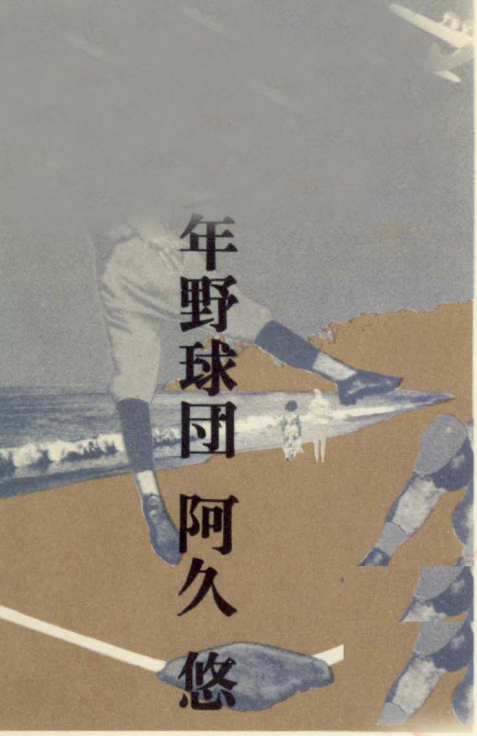

年野球団 阿久悠

山のさびしい湖に
ひとり来たのもさびしい心
胸のいたみに耐えかねて

著者略歴
1937(昭和12)年、兵庫県に生まれる。明治大学文学部卒業後、宣弘社(広告代理店)に勤め、1964年、放送作家として独立、70年から作詞活動を始める。著書：作詞入門、36歳・青年 時にはざんげの値打ちもある、ゴリラの首の懸賞金(長篇小説)、魚眼思考、その他。

瀬戸内少年野球団

一九七九年十一月五日 第一刷

定価 九八〇円

著者 阿久悠

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 東京(二六五)一二一一
郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 矢嶋製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Yuh Aku 1979 Printed in Japan

《瀬戸内少年野球団》　目次

かぼちゃの花――7
墨ぬりまつり――24
コロとヘラ――38
ジープは走る――51
三本足の怪人――64
古いボール――78
悲しき竹笛――93
一本刀里帰り――105
アホな夏――118
バラケツ兄弟――131
三角ベース――143
野球石器時代――156
唐辛子の整列――169

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

梅雨とハーモニカ――182
上には上――195
健康ボール――209
チーム誕生――224
足長おじさん――238
晴れの門出――252
プレイボール――265
大乱戦――279
サマータイム――292
夏景色――305

装丁　横尾忠則

瀬戸内少年野球団

日本音楽著作権協会承認済番号 7909789

かぼちゃの花

1

赤い花なら曼珠沙華ちゅうのんは
どこや知らんけど
オランダ屋敷ちゅうとこに
いっぱい咲いとって
雨が降っとるんやて
曼珠沙華が咲いたら雨が降るのんか
雨が降ったら曼珠沙華が咲くのんか
どっちゃが先かわからへんけど
これは長崎物語ちゅう歌の文句や

戦争が始まったのが
昭和十六年の十二月八日で
やった……やった……真珠湾や

そして　今が　昭和十九年の秋で
もう三年も戦争やっとる
出征兵士を送る行列が
泣き泣き歌って通っとる
なんや葬式みたいや
田圃の畦道に
真赤な彼岸花が咲いとった
これは　葬礼花ちゅうて
気色悪い花や
出征兵士大丈夫やろか
近頃　あまり
勝った！　勝った！　きかんけど

戦争ちゅうのんは
食べ物がなくなることで腹へるもんや
食べられるものが食べられんと
食べられん物を食べる時代や
ぼくら　芋食べたり　南瓜食べたり
菜っぱ食べたり　団子食べたり
うどん食べたりしてるけど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

こんなんはええ方で
どんぐりの粉食べたり
鶏のえさのふすま食べたり
藤の葉のお茶飲んだりしてるんやて
ぼくら　帳面や鉛筆を交換するのに
毎日どんぐり拾いしとる
まだしあわせの方や
学校へ行ったら先生が
曼珠沙華の根を掘って来いいうた
曼珠沙華はこんなところにあらへん
オランダ屋敷へ行かんとあらへん
それに
雨降っとるかどうかわからへんしな
そないに悩んどったら
アホ
曼珠沙華ちゅうのんは彼岸花のことや
ウワァ　葬礼花(そうれんばな)かいな　気色悪い
そんなんの根掘ってどないすんねん
そしたら
工夫して食べるんやて

誰食べるんやろ　気色悪いなあ
蛇出よるで　骸骨も出よるで
やめとこ　やめとこ
いうて騒いどったら
一列に並ばされてビンタもろた
ものすごう痛かった

雨も降らんのに
曼珠沙華がいっぱい咲いとった
墓場に近いとこで
風がひゅうひゅう泣いとって気色悪い
ぼくら
時々目えつぶって根を掘った
骸骨でるで　蛇出るで
一生懸命やっとったら
また出征兵士や
勝って来るぞと勇ましく
誓って家を出たからは
やっぱり泣き泣き歌っとる
戦争ちゅうのんは

勇ましいのんとちゃうやろか
がんばって下さい
ぼくらは
一生懸命　曼珠沙華掘りしてます

2

南瓜(かぼちゃ)が豊作の年は縁起が悪い。
そんなことを、祖母のはるからきかされたような気がする。
もし、それが本当だとするなら、今年はものすごく縁起の悪い年に違いない。
どこもかしこも南瓜の花の満開で、ジリジリと照りつける夏の日を、厚かましいような黄色が照り返している。
この頃は、どこもかしこも、南瓜の畑で、それがそろって豊作と来ているものだから、世の中は真黄色だ。この分では、アメリカやイギリスと戦う前に、あのいまいましい南瓜と一戦交えなければならないかもしれないと、竜太は思う。
竜太は、南瓜が嫌(きら)いだ。何故だかわからないが、あの形も、色も、味も気に入らない。気に入らないのはお互い様らしく、南瓜の方でも竜太に寒気を起させたり下痢を起させたりする。
この非常時に、南瓜が嫌いだなどというと、非国民だとののしられ、憲兵に連れて行かれるかもしれない。いや子供だから、憲兵までは行かなくても、巡査にみっちりと説教されることはあるかもしれない。しかし、と竜太はそこで安心する。竜太の祖父の忠勇は巡査であるから、そのくらいは、可愛い孫のために目をつむってくれるだろう。

誇り高い駐在所の巡査である忠勇も、孫には甘い。少し誇りを傷つけながらも、孫のために非国民になり、微罪を犯すだろう。
それにしても南瓜の花ざかりだ。
縁起が悪いとはどういうことだろう。

昭和二十年七月。
足柄竜太、八歳。国民学校三年生。

縁起が悪いことには、必ず前兆というものがあるものだと、これも祖母のはるが話してきかせたような気がする。縁起の悪い事柄が突然訪れるのではなく、そういえば何処(どこ)か変だったと後で思い当る前ぶれのようなものが必ずあるというのだ。
「そんなもん。あるかいな」
竜太はつぶやく。
「あらへん。迷信や」
竜太たちの身辺は、去年とくらべて天と地と程に違っていたが、それが縁起の悪いことの前兆とはとても思えない。
今年になって授業がほとんどなくなっていた。
登校はきちんとする。しかし、大抵は、芋畑に変った校庭で農作業をするか、それとも、山へ炭焼きの原木を運びに行くかのどっちかだ。国民学校初等科の一年生から六年生までが連なって山へ行き、体力に応じて原木を運んで来る。竜太たちは、己の身長ぐらいのを一本かつがされる。

それをかついで、二里（八キロ）近い山道を下って来るのは可成りきつい。重くて歩けなくなる子供が続出する。

そんな時、原木の切り出し役の高等科一年の生徒が、

「何しとるんじゃい。そんなことで、戦地の兵隊さんに申し訳立つと思うとるんかい」

と怒鳴り、倒れた下級生の尻を蹴り上げる。上級生は手ぶらだ。切り出しの鋸は、山小舎に置いてあるから、彼らは、行き戻りの道中は楽ちんの手ぶらで、只怒鳴っていればいい。そういえば、最上級生の高等科二年は、学校の裏の炭焼窯の番をする役で、竜太たちから見れば、体の大きな者程、楽な仕事をしているように思えてならない。

しかし、戦地の兵隊さんに申し訳が立つと思うのかといわれると、そんな疑問もふっとんでしまう。仕方ないと思うのではない。不思議な力がみなぎって来て、本当に頑張らなきゃと思えるのだ。

肩ヲ並ベテ　兄サント
今日モ学校ヘ　行ケルノハ
兵隊サンノ　オカゲデス
オ国ノタメニ
オ国ノタメニ　戦ッタ
兵隊サンノ　オカゲデス

そんな毎日で、教室で勉強をするということは数える程しかなくなっている。

異変といえば、男の先生が、どんどんいなくなり、女の先生ばかりになったことだ。この女の先生たちは、どういうわけかよく怒り、よく撲る。何かというと悪鬼の形相で物差しを振り上げ

ひっぱたくのだ。
いくら非常時だといわれても、戦地の兵隊さんを持ち出されても、竜太は、こればかりは理不尽に思えてならない。
ある時など、大デブの照国が、姿勢を正すようにと背中へ入れられていた物差しをヘシ折ってしまったことで逆上した女先生が、泣きわめきながら竹箒(たけぼうき)で撲りつけるのを見て、竜太が割って入ったことから騒ぎが大きくなったことがある。
照国は大デブだが大人しい。反抗するような子供じゃない。一にも二にもデブが原因で、何かのはずみで背中の物差しが折れてしまっただけだ。
それを、この子は反抗した、こんなことでは、明日の日本を背負って立つ少国民にはとてもなれない。兵隊さんに申し訳がない。天皇陛下に申し訳がないと撲りつけるものだから、竜太がとび出した。
それは違うと思ったのだ。
「先生。それは、ちゃう(違う)」
「何やの。級長のあんたまで、そんなこというの。級長の札はずしなさい。ようまあそんな恐しいことを。日本が、今どんな時か、なんぼあんたらでもわかるやろに」
「照国はそんなつもりやない。只動いただけや。ほたら、物差しが折れたんや」
「うるさい。照国。大体、この非常時に、そないにデブデブ肥えてること自体が非国民や。一体何食べとるの」
「照国は、芋食うとる。南瓜食うとる」
「竜太。あんたにきいてへん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c